

現代短歌分類辭典

第七十卷

津 端 亨 編 纂

津 端 亨 編 纂

現代短歌分類辞典

第七十卷

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

現代短歌分類辞典

70

昭和五十七年十一月二十日発行 定価一、八〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

東京都台東区鳥越一―十一―八

〒111

発行所 現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

振替 東京 三十九三一四番
電話 〇三(八五二)九八六九番

目

次

(第七十卷)

歌数	頁数		歌数	頁数
池	二四九	いけおきし	四	二〇〇
活け	二六	いけおきて	二	二〇一
埋け	二	池面	二	二〇一
池あと	二	生垣	二九	二〇
いけーあり	二	生垣越	四	二五
いけーありし	一六	生垣外	一	二六
いけーある	二	生垣沿ひ	一	二
畏敬	一	生垣根方	一	二
医芸くらぶ	一	生垣寄り	一	二
いけーいけーて	一	生け方	一	二
異教	一	いけがたみ	一	二
いけーうづみ	一	池川	四	二七
異教徒	二	池川君	一	二
いけうとめきて	二〇〇	いけかふる	一	二

池田人

池田益吉

池田町屋

いけーたまふ

池田山

いけーたり

いけーたりーし

いけーたる

いけーたるーならむ

いけーたるーは

いけーたれーば

いけーつ

いけづき

いけーつつ

いけーつぶち

いけーて

埋けーて

一

一

一

一

四

一三

一

三九

一

二

四

二

一

四

一

一五七

五

二四八

二四九

〃

〃

〃

二五〇

二五一

〃

二五五

〃

〃

二五六

〃

〃

二五七

〃

二七〇

池寺

池殿

生捕り

池どり

いけどりーし

いけどりーて

いけない(終止形)

いけない(連体形)

いけないーと

池中

池波

いけーなやむ

いけーなーん

いけーに

いけーにーけむ

いけーにーけり

生けーにーける

二

一三

一

一

一

二

四

二

二

一三

三

一

一

一

一

九

一

二七〇

二七一

二七三

〃

〃

〃

二七三

〃

〃

〃

二七五

〃

〃

〃

二七六

〃

二七七

いけ【池】（名詞）

地を掘りて水をたたへたる所

あかあかと朝日さしゐて池の蓮みながら秋の風ならぬなき

赤き池にひとりぼっちの真裸のをんな亡者の泣きゐるところ①

赤き黄色きボート整ふ池のあたりうるほふかげは春となりたり①

暁に山ゆきかひし白雲のしづくばかりの小さき池かな（心の遠景）

あかときの池の面しづか睡蓮のひらききるまを待ちて吾が居り③

暁の池は氷にとぢられてをし鳥二つ岩の上にあり①

あかつきのたづのなくねに夢さめて池のほとりをおもひうかぶる

暁も耕平も居き桜咲きて昼をつどひし池のべの家①

赤鳥居池に映れり佐用姫は祀られずして稻荷のほこら⑧

茜雲やややに冷え映るうぶすなの池の面ひそと鯉はうかび来（多磨四）

いけ

若山	齋藤	上代	与謝野	高橋	正岡	牧野	鈴江	川田	小林
牧水	茂吉	皓三	晶子	英子	子規	伸顕	幸太郎	順	正孝

いけ

上りたる成績ほめつつ日向辺に散髪し居れば陽を返す池①

あかるくし耀へりける春の池や白鳥はくちょうはゆたに水うごかしぬ①

明るくも春の日かげのさすところ池の古水いたくよこれぬ①

秋霞はれゆくなべに群青の池に楓の葉を散らしたる①

あき風に池のはちち葉かたよりてさやかにうつる月のかげかな①

秋風のさそふこの葉にさきだちて浮びそめたる池の水島①

秋霧をかすかに吸へり山上の八幡の池の睡蓮のはな（那須野）

あきくれてやなぎ織なる銀いろの葉をおとしゆく池の面へ①

秋雨に濁れる池の水の面にちりてさやけき萩のしら花

秋澄みて散りのこりたる花蓮とよみはつたふ広き池の上②（現代短歌全集）

秋立つや池の水錆の片よりに白はちすのみ咲きて風吹く

秋の雨ふる池の面に相聚あはれり無数のをさな真鯉の群は②

坂井菊枝

野村清

塚田菁紀

高橋俊人

明治天皇

明治天皇

与謝野晶子

鈴鹿俊子

高監背山

吉田正俊

若山牧水

田谷鋭

秋の池枯れし水草のさび果てぬかすかに鳴れる水よ何処いづこに⑭

秋の空に雲おほくなりて池の魚影にしばしばおどろきて散る⑤

秋の庭一葉とどめず水光る彼方の池に人の手洗ふ⑭

秋の日の池のおもてのうすぐもりおもむろにして鯉の行きけり①

秋の日の終りにきたりこの池に沈む無患樹むけんじの実を一つ見ず

秋晴るるこの原なかの小さき池子らはひそかに来り泳げり①

秋めきし夜雲がもとの暗き池かはづの鳴くはすでに稀なり③

秋もやや更けにけらしな水鳥のかげみえそめる山かげの池③

秋山のはざまに噴きて温泉の澄みたたへたる池は見飽かぬ

明らけき今宵の月夜奥の池に降りゐる鷺の空の鷺を呼ぶ⑪

明らけき月夜とならむ池の面ひと村雨はすぎゆきにけり②（現代短歌全集）

秋を三人椎の実なげし鯉やいづこ池の朝かぜ手と手つめたき（みだれ髪）

いけ

窪田 空穂

中村 憲吉

窪田 空穂

清水 比庵

飯田 莫哀

古泉 千桎

中村 憲吉

樋口 一葉

中島 哀浪

吉植 庄亮

水町 京子

与謝野 晶子

いけ

明くる間も暮るるも降れる雨水は庭を池ともなし果にけり⑨

あけがたの松のあらしにたちけむすくなくなりぬ池の水とり⑩

あけがたを霧降る池に水の音をりをりするは鯉はぬるなり⑪

朱古りし堂のひそけさみまもりて心疲れくれば池にそひて歩む⑫

朝あけて池のみぎはに飛びくだる鶴たづの羽ばたき大きくもあるか⑬

朝光に金魚浮べり池のぐるり菖蒲は白き花をひらきて⑭

朝かげに榛の若葉する古き池いづみ涸れて鴨のゐなくなりたり⑮

朝光はのびゆきて氷に触りしかば池輝きて前方にみゆ⑯

朝風にすがしと思ふ雛鶴の鳴く声やさし池の辺にして⑰

朝かぜに露ちる池のはちす葉は花におとらずゆかしかりけり⑱

あさかりにたつ人多しころして池にはかへれ小田のみづとり

浅草に来ておどおどする妻は池に来て池をきたなしと去る

(新萬葉
集別)

尾山篤二郎

昭憲皇太后

山口不二花

松田常憲

斎藤茂吉

金子信三郎

上代皓三

山崎一郎

今井邦子

樋口一葉

前田利邨

遠山繁夫

浅草の池の緋鯉に鯢を投げて秋の一日を悲しみにけり①（現代短歌大系）

和田 山蘭

朝ごとに数こそまされふせあみのうきめをしらぬ池の水鳥①

昭憲皇太后

朝毎に睡蓮の花池に咲く水に浮きたる花いとほしむ④

久保田 不二子

朝氷まだうすければ水底の落葉もみゆる池のおもかな①

明治 天皇

朝蘭くるま夏青空日をふらす池水面に光は躍る⑧

高田 浪吉

朝づく日さすかたにのみうかぶなりなかばこほれ池の水鳥①

明治 天皇

朝づく日にほふ堤にねぶりけり夜たださわぎしいけの水鳥②

明治 天皇

朝づくよほのぼの残る池のおもにさくやはちすの音のさやけさ①

井上 通泰

朝戸くれば池の金魚のきらきらとみな浮びをりて眼の下に泳ぐ⑫

土岐 善麿

朝な朝な草刈鎌を研ぎ浸す池の岸べの藤なみの花

結城哀草 果

朝の雨ふる池に透きくらぐらとめぐる鯉のなか白き鯉もをり②

田谷 鋭

朝の池に白き水鳥下りてゐて水照りしづかにひろげつつ居り

村野 次郎

いけ

いけ

朝の池に靄立つひさし松原のうぐひすの声は啼きてととのふ④

朝はやき池にボートを漕ぐみれば彼岸の幸福のひとつのごとし③

朝日かげうつりそめたる方にのみ波はありとも見ゆるいけかな①

朝日かげさし来て池の水鳥は沾羽ほすらし岸にのぼりぬ(朝雲)

朝日かげさしわたれどもはりつめし池の水はうは解けもせず②

朝日さすいけの氷のとけそめて水の煙もかすみけるかな①

麻漚すかど辺の泮は水きよし姝子にあはまくもよし⑨

朝日照る池の水鳥羽ばたきてひくく立つ時水を払へり(朝雲)

麻漬す山辺の泮は水きよしうす陽のかげにてれる浮藻葉⑩

浅間山雪の一夜は明けむとし湯宿の池に家鴨鳴きつぐ④

浅水の澄みて湛ふる林泉の池岩間の木賊梢枯れそめぬ③

あさみどりはすの葉うらもかつ見えて朝風わたるおほまへの池①

新年御
歌会始

中村憲吉

鹿兒島寿蔵

下田歌子

岡麓

明治天皇

昭憲皇太后

安江不空

岡麓

安江不空

奥貫信盈

広野三郎

井上通泰

朝靄に白蓮の池おぼろなり露の壁のみほの光りつつ（碧潮）

朝靄の匂ひただよふ池のべを水鶏の雛の二つ居り見ゆ

朝夕にひとり眺めぬ秋萩のうれながくさを池にうつるを③

朝ゆふの池になづさふ靄の気の岸の冬木に上るこのごろ③

足音に驚きにけむ池の鯉あぐるにごりの水の面にひろがる（秋風抄）

足音に寄り来る池のさまざまの鯉の頭は撫でてやりたし⑤

葦かびのすでに萌ゆらむ庭の池の沖べにありて鴨のなくなる②

あした見なば濁れる池の水すらに夜なれば清く星うつりたり

葦の若葉茂らふ池も江戸の名残にて淡き夕影によしきりのこゑ①

芦はみなしもがれふして水鳥のかずあらはにもみゆる池かな①

葦原のひかりしづまる夕まぐれ鳩来てかづく家の前の池①

足冷えて心ともしき夕ぐれの池の面にそそぐ雨かも

いけ

岡崎義恵

古泉千樫

久保田不二子

中村憲吉

松田常憲

中原綾子

栗原潔子

原阿佐緒

金子信三郎

明治天皇

堀内通孝

鈴木誠一

いけ

あしびの花盛りとなりし庭の池冬を越えたる小魚むれよる④

葦細く池を覆ひて茂れば太き短き小なぎ一群②

遊び所もなき村と言ふ友につきて鯉飼ふ池を夕べ見にゆく②

遊びゐし池の蓮葉笠にしてかけくる児らの夕立の雨①

あたたかう春立ち来れば池の水うすらに雲をうつしゐにけり①

あたらしき時間に触れしごとくにも新涼の庭の池の端に来つ(多磨)①

あたらしきゆかた姿に妹はなりて池の蓮の花かぞへ見る

あたらしく霞そだてむと岸より池を区切りて杭打ちてあり⑧

紫陽花の花咲くかげに雨多き日本の池濁りを湛ふ⑧

厚き氷のうへににじみて光るまで寒明けのちの池に和ぐ日よ③

暑き日の暮れて風立つ池の面清しむごとく跳ぬる鯉あり⑧(毎日歌壇)

厚氷とぢたる池の底までもてりとほるかとみゆる月かな①

久保田 不二子

斎藤 喜博

相良 義重

武島 羽衣

米倉 久子

平沢 進八郎

前田 林外

宮 柊二

宮 柊二

生方 たつゑ

香取 空

明治 天皇